

クレジット:

UTokyo Online Education 数理手法Ⅲ 2018 寒野善博

ライセンス:

利用者は、本講義資料を、教育的な目的に限ってページ単位で利用することができます。特に記載のない限り、本講義資料はページ単位でクリエイティブ・コモンズ 表示-非営利-改変禁止 ライセンスの下に提供されています。

<http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/4.0/>

本講義資料内には、東京大学が第三者より許諾を得て利用している画像等や、各種ライセンスによって提供されている画像等が含まれています。個々の画像等を本講義資料から切り離して利用することはできません。個々の画像等の利用については、それぞれの権利者の定めるところに従ってください。



準ニュートン法

微分可能な関数 $f: \mathbb{R}^n \rightarrow \mathbb{R}$ の無制約最小化問題

$$\text{Minimize } f(\mathbf{x})$$

を解くことを考える。

ニュートン (Newton) 法では, ニュートン方程式

$$\nabla^2 f(\mathbf{x}_k) \mathbf{d}_k = -\nabla f(\mathbf{x}_k) \quad (1)$$

の解として探索方向 \mathbf{d}_k を定め, 解を

$$\mathbf{x}_{k+1} = \mathbf{x}_k + \mathbf{d}_k \quad (2)$$

と更新する. 準ニュートン法は, (1) の $\nabla^2 f(\mathbf{x}_k)$ を適当な正定値行列 B_k で近似し, 探索方向 \mathbf{d}_k を線形方程式

$$B_k \mathbf{d}_k = -\nabla f(\mathbf{x}_k) \quad (3)$$

の解として定める解法である.

アルゴリズム 1 (準ニュートン法)

Require: $\mathbf{x}_0 \in \mathbb{R}^n, \epsilon > 0$.

- 1: $B_0 \leftarrow I$.
- 2: **for** $k = 0, 1, 2, \dots$ **do**
- 3: $\|\nabla f(\mathbf{x}_k)\| < \epsilon$ ならば, \mathbf{x}_k を解として出力し終了する.
- 4: $B_k \mathbf{d}_k = -\nabla f(\mathbf{x}_k)$ を解いて \mathbf{d}_k を求める.
- 5: 直線探索によりステップ幅 $\alpha_k > 0$ を定める.
- 6: $\mathbf{x}_{k+1} \leftarrow \mathbf{x}_k + \alpha_k \mathbf{d}_k$.
- 7: B_{k+1} を生成する.
- 8: **end for**

アルゴリズム 1 の 7 行目では, $\mathbf{x}_k, \mathbf{x}_{k+1}, \nabla f(\mathbf{x}_k), \nabla f(\mathbf{x}_{k+1})$ を用いて, 行列 B_k に修正を加えることで行列 B_{k+1} を生成する. 具体的な生成法はいくつか提案されているが, なかでも BFGS 公式^{*1}

$$B_{k+1} = B_k + \frac{\mathbf{y}_k \mathbf{y}_k^\top}{\mathbf{y}_k^\top \mathbf{s}_k} - \frac{B_k \mathbf{s}_k \mathbf{s}_k^\top B_k}{\mathbf{s}_k^\top B_k \mathbf{s}_k} \quad (4)$$

は最もよく用いられているものの一つである. ただし, 記号の簡単のために

$$\mathbf{s}_k := \mathbf{x}_{k+1} - \mathbf{x}_k, \quad \mathbf{y}_k := \nabla f(\mathbf{x}_{k+1}) - \nabla f(\mathbf{x}_k)$$

とおいた.

^{*1}C. G. Broyden (1970), R. Fletcher (1970), D. Goldfarb (1970), D. F. Shanno (1970) によって独立に提案されたので, 彼らの名前の頭文字をとってこのようによばれている.

(4) で定められる B_{k+1} は、次の性質 (a)–(c) を満たすことが確認できる：

(a) B_{k+1} は $B_{k+1}\mathbf{s}_k = \mathbf{y}_k$ を満たす（この等式は、セカント条件とよばれている）。

(b) B_k が対称行列ならば、 B_{k+1} も対称行列である。

(c) B_k が正定値かつ $\mathbf{s}_k^\top \mathbf{y}_k > 0$ ならば、 B_{k+1} も正定値である。

このうち、性質 (c) に注目する。アルゴリズム 1 の 5 行目では、ステップ幅 α_k がアルミホ (Armijo) の条件

$$f(\mathbf{x}_k + \alpha \mathbf{d}_k) \leq f(\mathbf{x}_k) + c_1 (\nabla f(\mathbf{x}_k)^\top \mathbf{d}_k) \alpha_k \quad (5)$$

を満たすように定めることが多い (c_1 は $0 < c_1 < 1$ を満たす定数である)。実は、これに加えて条件

$$\nabla f(\mathbf{x}_k + \alpha_k \mathbf{d}_k)^\top \mathbf{d}_k \geq c_2 (\nabla f(\mathbf{x}_k)^\top \mathbf{d}_k) \quad (6)$$

も満たすように選べば、 $\mathbf{s}_k^\top \mathbf{y}_k > 0$ が成り立つことを示すことができる (c_2 は $c_1 < c_2 < 1$ を満たす定数である)。なお、条件 (5) と (6) とを合わせたものは、直線探索におけるウルフ (Wolfe) の条件とよばれている。さて、 \mathbf{s}_k の定義より $\mathbf{d}_k = \mathbf{s}_k / \alpha_k$ が成り立つが、これを (6) へ代入することで不等式 $\nabla f(\mathbf{x}_{k+1})^\top \mathbf{s}_k \geq c_2 (\nabla f(\mathbf{x}_k)^\top \mathbf{s}_k)$ が得られる。この不等式と $\mathbf{y}_k, \mathbf{s}_k$ の定義および (3) より

$$\begin{aligned} \mathbf{y}_k^\top \mathbf{s}_k &= (\nabla f(\mathbf{x}_{k+1}) - \nabla f(\mathbf{x}_k))^\top \mathbf{s}_k \geq (c_2 - 1) \nabla f(\mathbf{x}_k)^\top (\alpha_k \mathbf{d}_k) \\ &= (c_2 - 1) (-\nabla f(\mathbf{x}_k)^\top B_k^{-1} \nabla f(\mathbf{x}_k)) \alpha_k \end{aligned} \quad (7)$$

が得られる。 B_k が正定値であれば B_k^{-1} も正定値であるから、 $c_2 < 1$ より (7) の最右辺は正である。したがって、 $\mathbf{s}_k^\top \mathbf{y}_k > 0$ が成り立つ。

行列 B_k の更新公式 (4) を、逆行列 B_k^{-1} に関する式に書き直すこともできる。つまり、 $H_k := B_k^{-1}$ 、 $H_{k+1} := B_{k+1}^{-1}$ とおくと、(4) と等価な式として

$$H_{k+1} = H_k - \frac{(H_k \mathbf{y}_k \mathbf{s}_k) + (H_k \mathbf{y}_k \mathbf{s}_k)^\top}{\mathbf{s}_k^\top \mathbf{y}_k} + \left(1 + \frac{\mathbf{y}_k^\top H_k \mathbf{y}_k}{\mathbf{s}_k^\top \mathbf{y}_k}\right) \frac{\mathbf{s}_k \mathbf{s}_k^\top}{\mathbf{s}_k^\top \mathbf{y}_k} \quad (8)$$

が得られる。この公式は、BFGS 公式の H 公式とよばれている^{*2}。

アルゴリズム 2 (BFGS 公式の H 公式を用いた準ニュートン法)

Require: $\mathbf{x}_0 \in \mathbb{R}^n, \epsilon > 0$.

- 1: $H_0 \leftarrow I$.
- 2: **for** $k = 0, 1, 2, \dots$ **do**
- 3: $\|\nabla f(\mathbf{x}_k)\| < \epsilon$ ならば、 \mathbf{x}_k を解として出力し終了する。
- 4: $\mathbf{d}_k = -H_k \nabla f(\mathbf{x}_k)$.
- 5: 直線探索によりステップ幅 $\alpha_k > 0$ を定める。
- 6: $\mathbf{x}_{k+1} \leftarrow \mathbf{x}_k + \alpha_k \mathbf{d}_k$.
- 7: (8) を用いて H_{k+1} を生成する。
- 8: **end for**

アルゴリズム 2 の 4 行目では、探索方向 \mathbf{d}_k は行列とベクトルの積として求められている。つまり、H 公式を用いると、(3) のような連立一次方程式を解く必要がない。

(以上)

^{*2}これに対して、(4) は B 公式とよばれることがある。